HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	野村真紀助教授の経歴と業績
Author(s)	権左, 武志
Citation	北大法学論集, 55(3), 327-337
Issue Date	2004-09-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/15310
Type	bulletin (other)
File Information	55(3)_p327-337.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

野村真紀助教授の経歴と業績

権左武志

故野村真紀助教授は、一九九五年四月に助教授に着任されて以来、二〇〇三年九月に逝去されるまで、八年半にわたり本学部、本研究科において日本政治思想史を中心とする研究教育に当たられた（後出の経歴、参照）。以下では、若くして亡くなられた野村助教授が残された幾つかの業績を振り返り、故人を偲ぶ縁としたい。なお、文献の引用に際しては、後出の業績一覧に依拠し、論文名と発表年のみを記すこととする。

（一）「「通人」からのユートピア」（一九九四年）

野村助教授は、一九九四年に発表したデビュー作「「通人」からのユートピア」で、大阪町人により設立され、徳川日本で儒学的教養の教場として知られた懐徳堂の政治思想を取り上げ、中でも十八世紀における懐徳堂学派の中心的思想家、中井履軒の政治思想を論じた。そこでは、履軒による中国儒学の古典解釈、経書解釈の独自な点を、朱子学の創始者朱熹や伊藤仁斎、荻生徂徠ら古学派による経書解釈と対比して綿密に分析した上で、履軒が、何よりも人間の本性を、朱子学的伝統に忠実な仕方で、善なる本性を種子のように宿した発展可能な存在として、即ち徳の種子を拡充すべき「可能態」として捉えていたと指摘する。だが、他方で履軒は、道を立てた聖人とも、道を志す学者とも異なり、道の外にあり、道から逸脱しがちなあるがままの人間、即ち「通人」と呼ばれる人間の「現実態」を前提としており、こうした「通人」から出発し、堕落を防止すべき制度改革の一環としてユートピア思想を構想したとされる（以上、

第一章)。

履軒にとり、日本の「封建」制は、中国の「郡県」制のような、皇帝直属の官吏による集権的政治体制に比べれば、世襲諸侯による分権的な体制である点において、古代中国の理想の世、「三代」の制度にも合致する望ましい政治体制であった。だが、日本封建制の問題は、何よりも他人を「うらやむ心」に駆り立てられ、虚栄心の充足を求めて際限なく競い合う「争闘の風」が激化する点にあった。履軒は、こうした日本の現状を改革し、「うらやむ心」もなければ「あらそい」も存在しない、「華胥国」と呼ばれる理想郷を実現するべく、様々な制度構想を思い巡らしたというのである。その骨子は、均田制や海外貿易停止のように、「争闘の風」が激化するのを抑止すべく平等性と閉鎖性を確保しながら、足高制や異姓養子禁止のように、一定の競争原理を導入し、「士風」を鼓舞して世襲制社会の停滞を打破するとともに、統治の質を向上させようとするものだった。

こうした履軒独特の政治観は、一方で聖人による道の作為を重視する徂徠学派の政治理解に対するポレーミックにおいて、他方では天子の肥大化した権力に依拠する中国の郡県制的モデルの論駁において何よりも真価を発揮することになる。徂徠が、通人を聖人の「大道術」に従わせ、道徳的存在に導くべき単なる操作の対象と見なしたのに対し、履軒は、聖人が身を以って示す「至誠」の徳が、人々を自ずと感動させ、道徳に向かう自発的意欲をかき立て、通人からなる社会を「和」に導くと考えたという。また履軒によれば、封建世界の割拠性こそ、堕落した治者を監視し、下からの放伐により暴君を交代させる「自然の勢い」の自浄作用を備えた政治制度として評価される。「天子のみが堕落の危険性から免れているとは限らない。集権的な郡県制度下の天子が堕落した場合、その恣意的な権力行使を防ぐ手立ては皆無である。履軒が郡県世界を「一人の私」と称したのは、このような危険性を示唆するためであった。…あらゆる人間に堕落の可能性がある以上、治者の有徳性は、臣下により絶えず監視される必要があるのである」(以上、第二章)。

だが、分権的な封建世界が絶えざる内乱の可能性を秘めている以上、履軒は、『中庸』の書に見られるような、「中和」と呼ばれる「人道の極致」を真の理想状態と見なすことになる。「中和」の理想世界とは、「人道」と「天道」が連続的に捉えられ、「理」を介して結びつくというまさに朱子学的な世界像であり、そこでは、「天命」が「正理」に収斂し、いわば「天理」化することで、「天命」に従う暴君放伐に正当性が付与されるという。ところが、履軒の肯定する朱子学的世界像は、同時代に力

を蓄えつつあった国学者の儒学批判を前にして致命的な弱点を露呈せざるを得ない。本居宣長が、人々を操り人形のように弄ぶ恣意的な「神」を前に人間の「徳」など所詮は無力であると、「天」を素朴に信頼する朱子学者たちを語気鋭く批判したのに対し、一切の「怪力乱神」を否定する懐徳堂学派も、通人たちの作る「自然の勢い」を頼みとする限り、有徳者の不遇という「世界の不完全性」のアポリアに対し説得力ある解答を与えられなかったというのである。ましてや、徳川家を含めた武家の支配を「天命」不在の非正統的支配と見なし、「孔子の教え」に反したが故に衰退した天皇家の新たな治世に賭けるという履軒の孤立した政治的選択は、半世紀後の王政復古により実現されるや否や即座に裏切られる運命にあったと評されるのである（以上、第三章）。

こうして野村助教授の決して読みやすくはない処女論文を読み返してみたとき、時に折衷学派とも称される懐徳堂学派の政治思想が、朱熹、仁斎、徂徠ら先人との対話を通じ、いかなる要素を取り入れ、いかに折衷して成立したか、いかなる折衷の仕方において個性的であるかが、驚くべき漢学的素養を土台として見事に解き明かされていることに気づかされる。少なくともこの最初の仕事が、法学部で初めて日本政治思想史を学んだ者が書き記すことができる修士論文の水準をはるかに凌駕していることだけは確かである。事実、筆者もご遺族の口から初めて耳にしたように、野村助教授は、ご家族の影響もあり、既に若くして中学生時代より漢籍に本格的に慣れ親しんでいたばかりか、高校生時代には、公刊されたばかりの丸山眞男氏の晩年の書『「文明論の概略」を読む』（一九八六年）に出会い、将来の進路を医学部から法学部に変更し日本政治思想史研究を志すことに決心したという。むろん、そればかりか、野村助教授のデビュー作のこの水準の高さは、一九四二年に丸山氏が東洋政治思想史講座を担当して以来、恩師の渡辺浩教授や平石直昭教授へと引き継がれて大きく発展してきた、戦後日本の半世紀を超える日本政治思想史研究の分厚い学問的蓄積の成果をそのまま反映するものである点は言うまでもない。

しかも、ここで対象として取り上げられた中井履軒自身が自らの時代の諸問題と正面から取り組み、誠実に格闘した思想家の一人であったように、野村助教授もまた、単なる過去の思想家の読解や注釈に終わることなく、そこから現代の政治課題に対するいかなる処方箋を引き出せるのかという明確な問題意識を抱いていた点は、十年前の政治改革論議で支配的だったディスクルスに言及する次のような終章の一節からもうかがい知れ

よう。「もし「通人」を「制度」によらしむべき対象として割り切るならば、時の統治者に働きかけ、制度を改革することが全ての問題解決となっただろう。しかし、履軒は「性善」説の立場を取り、人間を可能態として捉え続けた。彼の思想の豊かさ、及び弱味は、こうして人間の本性を敢えて「善か悪かの二者択一に」凍結させ得なかった点に存在する。」確かに、丸山眞男氏の例を引くまでもなく、洋の東西を問わず、政治学史上の偉大な第一級の業績は、いずれも意図せずとも、自らの生きた時代の課題と対決する中で、過去の古典的テクストを思索の手がかりとして現在に生かそうとする真摯な営みであったし、今後もそうあり続けるであろう。

（二）「近世日本における「神の見えざる手」」（二〇〇〇年）

中井履軒のユートピア思想に引き続き、野村助教授が博士論文の主題として選んで、その後に集中的に取り組んだのが、大阪の堂島米相場を対象とする近世日本における市場社会の形成というテーマであり、一九九六年に研究会で何度か報告された後、二〇〇〇年に初めて「近世日本における「神の見えざる手」」と題して公表された。

ここで野村助教授は、堂島米市場で取引に従事した町人たちが、米価の決定される市場メカニズムを、いかなる個人も権力も左右できない自律的な運動体として、即ち近世日本版「レッセ・フェール」として捉えていたばかりか、相場が変動するメカニズムを、取引従事者の発する「人気」「景気」「世間の勢い」といった独特な概念で分析しており、懐徳堂学派の山片蟠桃により「天」や「神」と同一視されていた点に注目する。とりわけ堂島米市場では、正米という現物決済の取引と並んで、帳合米という帳面上だけで決済する先物取引が行われていたが、後者の帳合米相場は、「人気（じんき）」と呼ばれる人々の集合的思惑により決定されると考えられていた。相場の変動を左右する「人気」とは、商品に対する需要という現代的な合理的意味合いを持つだけでなく、そもそも天地自然の働きと人間社会の変化を共通の原理により理解し、「天地の気」から相場の変動を説明するという天人相関の儒学的世界観、更には農耕社会の伝統的世界観に根ざした非合理的概念であった。その意味で、「人気」の概念は、個人の思惑の単純な算術的合成として価格に解消されるのでなく、堂島米会所に集った人々から立ち昇るエネルギーの固まりとして一つの実体を持っていたとされる。従って、米相場の価格決定要因とされた「人気」とは、市場に作用する「天地の気」の一種として、天地自然の運動と連動す

るものと考えられていた一方で、市場が自然界から独立した自己完結的な空間と見なされるようになると、人々の思惑が集合することで成り立つ人為的産物、即ち「人気（にんき）」の観念へと変質を迫られることになった。そして、市場が自然現象から独立した社会制度として捉えられ、前者の意味での「人気（じんき）」概念から後者の「人気（にんき）」の観念が析出されていく過程こそ、東アジアにおける「神の見えざる手」の発見であったと結論されるのである。

日本の経済思想史に通じていない筆者は、この第二作を学術的に批評するだけの資格を本来備えていない。だが、野村助教授自身、この準備稿に当たる原稿を報告した後も敢えて積極的に公表しようとしなかった点からもうかがわれるように、歴史論文としては未開拓の領域を新資料により解明した独創的業績でありながら、政治思想史の論文としては様々な批判に開かれた理論的弱みを示しているように思われる。例えば、こうした大阪町人の経済思想に見られる近世日本における市場社会の前期的把握は、他の儒学的－伝統的世界観の範疇のように、明治維新以後の日本の近代化へと受け継がれ、何らかの積極的機能を果たすことになったのであろうか。堂島米相場に見られるこうした投機的－冒険者的商人資本主義の姿とは、十八世紀英国の南海会社投機から一九二〇年代フロリダの土地投機を経て一九八〇年代日本のバブル経済に至るまで、古今東西を問わず歴史上繰り返し見られた現象ではないだろうか。ヨーロッパ近代の経営資本主義を推し進めた合理主義の精神は、史上一回限りカルヴィニストの壮絶な一神教的世界観からする意図せざる結果として生じたというヴェーバーのテーゼを前にして、多神教特有のアニミズム的世界観に従う大阪町人の先物取引理解は、欧米人から見れば、余りにも無邪気な「呪術の園」の描写と映ることはないだろうか。西欧クリスト教文化という鋼鉄のように堅い壁に突き当たった体験をした者ならば、誰もが最初に思い当たるはずのこうした数々の疑問と正面から格闘した形跡は、残念ながらこの仕事からうかがわれない。むしろ、本論文からも読み取れるような、易や卜占に対し庶民が示す素朴な信頼感、その背景に横たわる「気」中心の世界観を内在的に理解しようとする研究視角は、最後に至るまで筆者の理解を超えていたことを率直に告白しなければならない。

この後、野村助教授は、本学の中国文学研究者佐藤錬太郎教授らと一緒に、曹洞宗の萬松行秀による『従容録』を翻訳し訳注を付する共同研究に加わり、文学部紀要『中国哲学』に連名で発表した。また『日本開化小史』を初めとする田口卯吉の初

期思想、近世町人思想と易的世界観との関連、石門心学者と近世禅家の思想交流といったテーマに取り組み、次なる研究の方向を手探りで模索する中で、次第に研究関心を当初の儒学思想から新たに仏教思想へ移していったと思われる。特に二〇〇三年五月からは、文部科学省内地研究員として東京大学大学院法学政治学研究科に内地留学し、近世仮名法語を史料として近世仏教（特に禅）の庶民教化思想の分析に携わっていた。

（三）「近世日本における儒仏一致論とその展開」（二〇〇三年）

こうした中、野村助教授は、二〇〇三年七月、日韓学術シンポジウムで「近世日本における儒仏一致論とその展開」と題する報告を行ったが、その二ヶ月後に突然逝去された後で遺稿として残されたのが、このときの報告原稿である（本号掲載）。このシンポジウム報告で、野村助教授は、禅の立場から儒学と仏教の一致を説いた近世後期の三人の思想家を取り上げ、いずれも人間の「権利の平等」について共通する洞察を含んでいたと論じている。

儒教と仏教という史的起源も世界観も異なる二つの世界宗教が、極東の島国に入りこんで否応なく同居する運命となったとき、日本の儒学者は、仏教の「出家」概念を取り上げ、親子関係より個人的悟りを重んじる反社会的教説として批判したのに対し、両宗教の両立可能性を弁証するべく、次の三つの類型からなる儒仏一致論が展開されたという。第一が、先祖と同じ神仏を信仰するのが親への「孝」だと説く儒学的価値に基づく儒仏一致論、第二が、現世で生身の人間が「仏」（＝釈尊という歴史上の人物）と同じ悟りを開き、「成仏」する可能性を強調して、出家と在家の区別を相対化する現世成仏論による儒仏一致論、第三が、儒学と仏教に共通する普遍的教説を見出そうとする普遍的価値志向の儒仏一致論であり、このうち第二、第三の類型が、白隠禅師、石田梅岩、鳥尾得庵という三人の思想家に即して順次論じられる。

まず白隠禅師は、「人欲」という朱子学の概念を仏教における「煩悩」と同一だと見なし、人欲を去り、天理につく朱子学的修養の実践は、愚痴、怒り、妬みといった悪念を取り去り、誰にも備わる「仏心」を体験的に知る禅の修行と実質的に重なり合うと論じ、仏教の立場から儒仏一致を説いたという。そのため、精神集中により五感や意識を離脱して、自分の中にあり、自分を動かしている「真の主体」を知るという修養方法が唱えられた。第二に、石門心学の開祖石田梅岩は、人欲が起こると自他の区別が発生するという理由から、私欲を取り去り、自他

の区別がなくなった心境において初めて、人間本来の平等な姿が見えてくると論じ、儒学の立場から儒仏一致を説いた。言い換えれば、自己に備わる「仏性」を知れば、自他の区別なく、他の人々にも仏性が備わっており、人間が平等である事実が分かるという。白隠禅師や石田梅岩は、いずれも仏性を探求する過程で、貴賤上下や老若男女の区別が存在する現実世界の背後に、五感では捉えられない、真の主体が存在する何らかの超越的世界を想定していた。第三に、鳥尾得庵は、こうした私欲が取り払われ、自他の区別がなくなる「本質世界」を主題として取り上げ、この自他未分離の世界において初めて、天地と一体である「真の自己」、人間本来の対等な姿が発見できると論じた。そして、本質世界という超現実的状態の想定が、現実世界の価値の優劣を問い直し、現実の政治制度や社会関係のあり方を検証するような社会契約説論者の自然状態論と同じ機能を果たしたという。こうして儒仏一致論者に見られる現世成仏論や本質世界の探求は、「権利の平等」という人間の存在価値の平等をめぐる思索の跡として再評価されるのである。

野村助教授の遺作となったこの論考は、ご遺族の関係者の話では、実はより大きな構想の一部をなしていたにすぎないとされるが、構想全体の真意をうかがう機会は永遠に失われることになった。ただ、この頃の野村助教授が禅思想の研究に並々ならぬ関心を示し、個人的にも禅の修業に打ち込んでいたその内面的動機付けは、ここからはっきりと見て取ることができる。そればかりか、中国儒教とインド仏教という異質な世界観が東アジアの一角でいかに融合し、いかに独自な雑種的文化を生み出すに至ったか、また西欧クリスト教文化の中から育まれた近代政治原理に相当するものが、東アジアの異なる伝統の中にも内在するのではないかという、恩師より継承した問題意識の一端をここに読み取ることができよう。だが、敢えて視点を逆に転じて、ヨーロッパ精神史の中にこれと類似する思潮を探し求めるとすれば、最初の仕事は、あたかも共和政ローマに蘇ったアリストテレスが、帝政への抗し難い時代の趨勢を前にキケロさながらに敗れ去り、沈黙を余儀なくされる様子を彷彿とさせるのに対し、この最後の仕事は、疎外現象に充ちた現世への批判を跳躍台として、自らが生まれ育った主客未分離な始原の楽園に回帰するという新プラトン主義以来の世界像を想い起させるものである。ただ、宗教社会学的には「神秘主義」とも呼ばれるこうした世界像には、逆に主客の痛切な分離を代償として初めて得られる自己二重化する反省能力こそ、「主体的自由」と呼ばれる権利の平等の確たる基盤をなすというヘーゲルのロ

マン主義批判が等しく当てはまるとは言えないであろうか、野村助教授がお元気ならば、こう尋ねてみたい気がする。

いずれにせよ、これまで簡潔に振り返ってみた野村助教授の仕事の最初と最後――中井履軒のユートピア思想と近世日本の儒仏一致論――は、実は深い意味において、即ちわれわれ人間の実現すべき究極目的（テロス）は何なのかという古代思想以来の問いを再び活性化し、ヨーロッパ形而上学の根本問題への回答を東アジアに固有な伝統の中に探し求める作業である点において見事に合致している。だが、それだけには止まらない。古典的テクストの解釈が、根本において解釈者の生きる現在への大胆な適用であり、現代への絶えざる再生（ルネサンス）の試みであり続ける限り、これらの仕事は、紛れもなく反時代的メッセージ、つまり「争闘の風」が激化し「悪念」がはびこる、国立大学を取り巻く昨今の現状に対する厳しい警告の声でもある。こうした警告の声が空しく木霊するに任せるのか、それとも何らかの形で知的共同体の再建に今後生かしていくのか、それは、残された仕事を受け取るわれわれ自身の主体的選択の問題だと言えよう。

野村真紀助教授経歴

昭和四三年　四月一八日　兵庫県加古川市に生まれる
昭和六二年　三月　兵庫県立加古川東高等学校卒業
平成　三年　三月　東京大学法学部第三類（政治コース）卒業
平成　三年　四月　東京大学大学院法学政治学研究科修士課程（政治専攻）入学
平成　五年　三月　同右修了
平成　五年　四月　東京大学大学院法学政治学研究科博士課程（政治専攻）入学
平成　七年　三月　同右単位取得退学
平成　七年　四月　北海道大学法学部助教授
平成一二年　四月　北海道大学大学院法学研究科助教授
平成一五年　九月二〇日　死　去

野村真紀助教授業績一覧

I　論説・翻訳等

一九九四年（平成六年）

「通人」からのユートピア――「華胥国王」・中井履軒の思想――　国家学会雑誌一〇七巻七・八号

一九九七年（平成九年）

従容録（一）（共訳）　中国哲学（北海道大学文学部）二六号

一九九八年（平成一〇年）

「元始、太陽は女性であった」？　北大政治研究会会報一九号

従容録（二）（共訳）　中国哲学（北海道大学文学部）二七号

二〇〇〇年（平成一二年）

近世日本における「神の見えざる手」――堂島米相場の町人思想　小川浩三編「複数の近代＜北大法学部ライブラリー6＞」（北海道大学図書刊行会）

二〇〇三年（平成一五年）

近世日本における儒仏一致論とその展開

政治思想学会刊 CD-ROM、北大法学論集、本号掲載

Ⅱ　書評

一九九四年（平成六年）

子安宣邦「「事件」としての徂徠学」

同「鬼神論――儒家知識人のディスクール」

同「本居宣長」　国家学会雑誌一〇七巻七・八号

一九九五年（平成七年）

陶徳民「懐徳堂朱子学の研究」　日本思想史学二七号

Ⅲ　研究会報告

一九九三年（平成五年）九月一八日

懐徳堂「無鬼」論の意義――「華胥国王」・中井履軒の思想を中心に――　東京大学政治理論研究会（於、東京大学）

一九九四年（平成六年）九月一一日

「通人」からのユートピア――「華胥国王」・中井履軒の思想――　日本思想研究会（於、上智大学）

一九九六年（平成八年）三月二三日

堂島米市場と「神の見えざる手」――近世日本における市場社会の形成と武士の役割――　荻生徂徠研究会（於、上智大学）

一九九六年（平成八年）六月二八日

堂島米市場と「神の見えざる手」――近世日本における市場社会の形成――　北大法学会、北大政治研究会（共催）（於、北海道大学）

二〇〇三年（平成一五年）七月二一日

近世日本における儒仏一致論とその展開　日韓政治思想学会第二回共同学術会議（於、法政大学）

Ⅳ　科学研究費

一九九六年（平成八年）

奨励研究（A）近世後期～幕末維新期における体制変革構想――市場経済社会の成熟と中央集権化の可否――

一九九七年（平成九年）～一九九八年（平成一〇年）

奨励研究（A）近世後期日本におけるナショナルアイデンティ

ティーの形成と市場社会の成立

二〇〇〇年（平成一二年）～二〇〇一年（平成一三年）

奨励研究（A）近世日本における市場社会の成立と「易」的世界観――「気」概念の庶民層への浸透――

二〇〇三年（平成一五年）～二〇〇五年（平成一七年）

若手研究（B）政治思想としての近世仮名法語：鈴木正三から平塚らいてうまで